

五言絶句『登鶴鵲楼』について

— ある仮説の試み —

秦 耕 司

一. はじめに

最初に、詩の全文とその通説を掲げておこう。

白日依山尽	白日は山に寄りそうようにして沈み
黄河入海流	黄河は東海をめざして流れ行く
欲窮千里目	千里の眺望をきわめつくすには
更上一层楼	どれ、もう一階上へ上ろうか

(中国古典文学体系18『唐代詩集』下)

中国においても、日本においても、人口に膾炙している、余りにも有名なこの詩は、作詩の背景とか、作者の心境など、その内容解釈を巡って、問題となっている点は、ほとんどないと言ってよい。ただ“白日”という字句解釈を巡って、「真昼の太陽」か「夕日」かという、詩の情景の時間的背景の違いや“一層楼”が「一階上」か、「鶴鵲楼」そのものかという類の議論が存在しているだけである。雄大な景色を眺めるだけを詠ったものであるなら、それでもよいであろう。しかしそれでは、中国の古代詩に対する解釈としては、少々平凡に過ぎはしないだろうか。もちろん作者の

伝記や事跡がはっきりしていなければ、作詩の背景など論ずるのは、不可能かも知れない。しかし詩である以上、先ずもって、そこに作者の何らかの心情が反映されていると考えてみるのが、筋ではなかろうか。通説にひっかかりを感じる時、そのような観点から見直してみるのも、また一興であろう。小論は、作詩の背景に、敢えて大胆な仮説を設け、作者の内面にまで目を向けてみようとするものである。

二. 通説への疑問1——“入海流”

本論に入る前に、従来の解釈に沿って、言葉の表す意味からのみ、この詩を眺め、その問題点を提示しておくことにしよう。

今、先入観を捨て去り、一字一句の意味を冷静に吟味してみると、上述の議論のある語句とは別に、語義解釈上、すっきりしないところが、二カ所あることに気が付くであろう。二句目の“入海流”と三句目の“窮千里目”である。

先ずひっかかるのは、“入”という動詞である。周知の通り、作者のいる鶴鵲楼は、内陸部の山西省の西南部にあって、黄河の注ぎ込んでいる渤海湾など見るすべもない。そこで当然のこととして、「海をめぎして流れる」という解釈が生れ、その説が定着し、そこから、遙か千里の彼方の海に向かって、滔々と流れる黄河→雄大な風景——にまで発展解釈されることになった。滑稽な話である。そうであるなら、“入”よりも“向”を用いた方が、海までの距離感が出て、より鮮明にその感じを出すことができるし、“連”を用いて“連海流”とすれば、情景描写に奥行きや広がりも出よう。“入海流”は、黄河が海に注ぎ込んでいるその地点に焦点を当てた言い方である。遠く千里の彼方に向かって流れるというのなら、“入海流”はむしろ、表現としては稚拙な感をまぬがれないであろう。

この点について、筆者と同様の感じを抱いたのであろうか、『万首唐人絶句』の編者洪邁(1123～1202)は、“入”を用いずに“徹”を用いて、“徹

海流”としている。“入”と“徹”は、その字形からして、誤写ではあり得ない。洪邁の考えであろう。“徹”は“徹底”“徹曉”など「最後の地点(時点)までやり通す」の意を表すので、その方が、単に方向を表す“向”よりも、黄河の流れの勢いが出るというのであろうか。しかしこの句に関しては、字句の異同は存在していない。字句の異同が存在していない限り、第三者が勝手に文字を改めることは、解釈上余程の矛盾がない限り、控えるべきであろう。

ここでは、平仄面でも、対句用法としても、“向”や“連”を用いることに問題はないし、むしろ対句上は、その方がバランスがとれていて、すわりがよい。従って、この点を考慮に入れると、作者がここで“入”を用いている限りは、作者自身が、黄河が“海”に“入”するのを目の前にしていると、解せざるを得ない。それは“入海流”は、黄河が海に注ぎ込んでいるその光景が、現実のものとして、眼前に存在している感が強いからでもある。「海に入るのを想像して」という解釈も、筆者には首肯しかねるのである。海の全く見えない内陸部にあって、その光景を直接目にしてあるかのように“入海流”と表現した作者。それは何を意味しているのであろうか。

この一句を語構成の面から見れば、矛盾は一層明白になる。“入海流”は、一つの主語に対して、二つの動詞句を連用させる連動連語である。唐詩では、五言や七言など、短い句においても、連動連語は比較的よく用いられており、決して珍しい用法ではない。そして二つの動詞によって表される二つの事柄の前後関係は、現れる動詞の順番であることは、言うまでもない。同じ“入”と“流”を用いた連動文の詩句を見てみよう。

李白『蛾眉山月歌』

蛾眉山月半輪秋	蛾眉山月半輪の秋
影入平羌江水流	影は平羌江水に入りて流る

二句目の意味は、月影は平羌江に入って（水面に映って）、水とともに流れる、の意味である。これと同じように“黄河入海流”の句を言語表現に沿って忠実に解釈すれば、黄河は「流れて海に入る」のではなくて、「海に入って流れつづける」ということになる。従って、“流入海”とすべきところを、押韻の関係で“入海流”としたという説は、成立しがたくなるのである。語順を入れ換えても、意味に変化をきたさないのなら、それも一法であろう。しかしこのように、黄河が海に流れ込んでいる地点を中心として、描写の焦点が、一方は前に、一方は後に移り、意味が全く異ったものになるのなら、そのような手段をとることはできなくなるからである。押韻のためだけなら“向海流”もしくは“連海流”でもよいし、上述のように、その方が“入海流”と比較して、黄河の流れる方向と、海に到達するまでの距離感や広がりが出て、雄大な景色を眺める表現としては、より生きた言い方になる。そればかりではない。対句法から見た場合でも、作者自身が眼の前に眺めている光景を描写した“依山尽”と対にする句としては、同じように写実描写である“向海流”や“連海流”の方が釣り合いがとれている。想像を基にした観念的表現である“入海流”は、“依山尽”との対句としては、“向海流”や“連海流”に一步譲るのである。

河川は、自然現象として、海に流れ込むのが常識である。そのことを十分に承知しながら、黄河の流れを、海に到達するまでの情景としては詠わずに、「海に入ってから流れつづける」と、川の流れとしては不必要な面に、わざわざ焦点を当てて表現した作者。作者はそこに何を言わんとしたのだろうか。

三. 通説への疑問 2 —— “窮千里目”

次に、同じく動詞“窮”について考えてみよう。前半二句を通説通りに解すると、この“窮”の意味とも噛み合わないのである。“窮”の基本的な意味は、「行きつく所まで行く、究極点に達する」意であって、「行きつ

いた究極点（“窮谷、窮髪”）」を基礎として、プラス評価の「その結果、何かが明かになる（“窮理、窮研”）」、マイナス評価の「行きづまる（“窮困、窮途”）」の二つの方向への発展がある。そして他動詞として用いられる場合には、プラス評価の「何かを明かにする」意味で用いられるのが普通である。だからここは「キワメル」とするしかない。目的語は、遠くの景色、光景を表す“千里目”。つまり「千里の彼方に何かがあるのか、千里の彼方はどうなっているのか、それを見キワメたい」とするのが、この句の持つ意味であろう。単に遠くの景色を眺めるだけではない。目的語“千里目”の内容は、“白日依山尽”もしくは“黄河入海流”。動詞“窮”とは、どのような関係にあるのだろうか。前半の二句を通説通りに解し、“窮”の基本義に沿って見ることにしよう。

我々が夕日を眺める時は、普通夕日そのものを眺めるのであり、周辺の景色は、（赤く染まった）空の雲や山々など、全体的な眺めであって、感動は、そのような雄大な景色を一望するところに生れる。そしてその美しさに打たれながら、個々のものや、こまごまとしたものには、あまり関心が向かないのが普通である。そのような時に、その眼に映っている景色の一部である何かを見キワメたいという欲求は、果たして起こるであろうか。夕日が白く輝いていれば、眼に眩しく、尚更そうであろう。また目的語“千里目”は漠然とした言い方であるし、“尽”に焦点を合わせて解釈すれば、太陽はすでに山陰に隠れて見えなくなっていることになる。いずれにしても“窮”の表す意味とは、どこか噛み合わないものを感じるのであるが、如何であろうか。

では、“千里目”を、“黄河入海流”とするとどうであろうか。日は西に傾き、黄河は南に流れている。西の空に夕日が浮かんでいる場合、夕方の景色を眺めるのは、夕日を賞でるのが普通である。そして眼下には、竜門を過ぎたあたりから平地となって、急に川幅を広げた黄河が、満々と水をたたえて横たわり、それが左手南の方にゆったりと流れていれば、視線がそちらに移るのもまた自然である。夕日が輝いている場合、視線は尚更太

陽を避けて、黄河の流れ行く方向に焦点を据えるであろう。正面には華山、前方左手には中条山、いずれも二千メートル前後の山並みで景勝の地である。もちろん感動はある。それで、黄河が海に流れ込むところなど見えるはずもないが、この雄大な景色に感動するあまり、見えないことを承知の上で、何とかその様を目にしたいという、作者のそれだけ強い願望が、このような表現となったのであろうか。しかしそこまで考えてたとしても、今一つじっくりいかないものを感じるのである。

それでは“欲窮千里目”は通説のように、単に視界の限りを尽くして遠くを見たい、という意味であろうか。つまり“窮”を“極”と同じ意味にとるのである。「黄河が海に流れ込んでいるさまを想像して」という解釈はそこから生れよう。しかし眼前に展開している黄河の流れが、雄大な山並みと合体して一幅の風景となっていれば、感動はその直接眼にしている光景に生じるわけであるから、そのような時に、果たして海に入る様など念頭に浮かべるであろうか。しかも、黄河の流れ行く先には、暢当が『鶴鵲樓』で“河流入断山”と表現したように、華山や中条山の山々が聳え立っているのである。海など想像だに及ばないほどの内陸部にあって、しかもこのような雄大な山々を背景にした光景を前にしている時に、黄河が海に流れ込む様を思い浮かべるなど、突飛に過ぎよう。単に言葉じりのつじつま合わせのための解釈という印象を受けざるを得ないのである。

以上のようなことは、作者自身百も承知であろう。にも拘らず“欲窮千里目”と表現した作者。作者は一体そこに、何を見キワメようとしたのだろうか。

“窮”に関する議論は暫くおき、別の角度から検討を加えてみよう。作者は“欲窮千里目”したいがために“更上一層楼”するのであるが、鶴鵲樓が三層からなっているとすれば、副詞“更”があることによって、作者は今二層にいて、これから三層に上がろうとしていることが解る。今一層の高さを3メートル（現在の黄鶴樓は五層で、一層は約5メートル。唐代は二層。現在の岳陽樓は三層で、一層は約3メートル。唐代の鶴鵲樓は、

元来黄河の中洲にあったということからしても、3メートルとみて、大きくずれることはないであろう)とすると、遙か千里の景色を眺めるのに、僅かに3メートル高く上がって見たところで、どのくらい眺望が変わるであろうか。それは足下の景色が心持ち変わる程度で、視線が遠くに移るほど変化は少なく、夕日の沈む遠くの山や、黄河の流れ行く先など、ほとんど変わりようがない。このことは、現在武漢にある黄鹤楼から、近くの揚子江を眺めてみるまでもなく、我々の住むアパートやマンション、またビルから実験してみれば、すぐに得心のいくことである。ましてやこの鶴鶴楼の建っている所が、高台でもなんでもなく、黄河自身の中洲¹⁾で、周囲とあまり変わらない平地(鶴鶴楼自体が後に水に流された)であってみれば、“欲窮千里目”と表現したこと自体、そのセンスを疑われても、弁護の余地はないであろう。

雄大な景色を眼前にした時、誰しもより高い処へ上がって見たいと思う。それは事実である。しかし同じ場所において、僅か数メートル上がったくらいで、あまり変わりばえのしない景色に、却ってガッカリするのもまた事実である。期待が大きければ、それだけ失望もまた大きい。本当に作者が雄大な景色を眺めて、更に遠くまでも見極めたいとして、一層上がったとすれば、恐らく期待はずれに終わってしまい、このような詩句は、たぶん思い浮かばなかったと思われるのである。それとも、上がった結果、期待はずれに終わったので、上がるまでの気持を詩にしたとでもいうのであろうか。

とりわけ高い評価を受けているのは結句であろう。千里の眺望をきわめようと更に上の階に上るとだけ述べ、そこでの眺望、それを目にした作者の心境については全く触れられていない。それらについては、一切が読者の想像に委ねられているわけであるが、これによって作品の味わいが無限に深められるのである。(『唐詩解釈辞典』p. 81)

と惜しみなく賛辞を贈るのは、“欲窮千里目”という表現から、思わず錯覚に陥ったのであろうか。

高層ビルからの眺望を身近なものとして見慣れている我々現代人の感覚を、そのまま当時の人々に当てはめるのは、相応しくないのかも知れない。また筆者自身が、近年改築完成になったばかりの、堂々たる黄鶴楼で、すでに5メートルの落差の違い（のないこと）を経験しているからかも知れない。一昨年（2017年）の三月に、洞庭湖を望む岳陽楼の、その小じんまりとした姿を眼の当りにした時には、思わず微笑んでしまったこと。そして、二層に上がった時に、その天井の余りの低さに、筆者は確認のために、三層に上がろうとしていた気持が萎えてしまったことを付け加えておこう。

このように、この五言絶句を、通説通りに、単に雄大な景色を眺めるという面だけで捉えようとする限り、最も基本的な字句解釈や絶句の基本的形式である対句表現において、幾つかの矛盾が生じるのである。有名な詩句は、有名であるが故に、通説をそのまま受け入れ易く、その矛盾点には気が付きにくいという好例である。

四. 仮 説

ここで簡単に、筆者の仮説を提示しておこう。

“白日”は白い太陽。輝きはない。せいぜい鈍く輝いている程度。夕日である。季節は初冬。ここでは天子を指す。

“依山尽”は、文字通り山陰に隠れて沈むの意味。“尽”とあるから、太陽がすっかり沈んで見えなくなった後を言う。ただし、太陽が山の端にさしかかってから沈むまでの過程も含んでいる。ここでは天子の権威が次第に霞んできて、遂には埋没したことを表す。

“黄河”は中国文明をはぐくみ育てた母なる大河。時代の移り変わり、歴史の変遷の比喩。ここでは唐王朝の過去、現在、未来を指す。つまり唐王朝を黄河の流れに譬えたのである。

“海”は太陽が沈んで、薄暗くなりつつある空間もしくは大地。ここでは唐室内の不穏な状況を暗示。

“欲窮千里目”とは、暗雲が立ち込めてきた唐王室内の実情を憂え、その行く末を見きわめたいこと（“極”は単に程度において極点に達する意味なので、真相を明らかにする意味を持つ“窮”を用いたのである）。そのために少しでも遠く（未来）が見たいので、“更上一层楼”するのである。

五. 検証1——“白日依山尽”

それでは一字一句細かく見ていくことにしよう。

“白日”は「まっしろにぎらぎらとかがやく、まひるの太陽というのが普通の語義である」とする吉川幸次郎氏の新釈提示²⁾以来、夕日と真昼の太陽の二説に解釈が分かれていたが、その吉川氏の説に疑問を抱いた清水茂氏によって、漢から晋までの詩および李白や杜甫の詩が詳細に調査され、論文が発表されている³⁾。それによれば、“白日”を昼の太陽とするのは4例、夕日は32例、朝の太陽は1例、不定のが70例である。つまり“白日”は単に「太陽」という意味であって、それ自身には、昼の太陽もしくは夕日などの特定の意味はなく、それを特定化するのは文脈しかないことが判明したのである。雄大な景色を眺めるのだから、黄昏時はふさわしくないという見解もあるが、日暮時の千里の眺めを詠った唐詩は、後に見るように少なくない。やはりここでは“依山尽”より、常識的に夕日ととるのが自然であろう。

名詞を修飾する単音節の形容詞は、名詞を分類・限定する働きの外、名詞の性質・属性を表すのも基本的な用法であることは、清水氏の指摘する通りである。現代語の“高山（*低山）、大海（*小海）”などと同様であるとみてよい。夕日と言えば、我々日本人は、ふつう赤い色を連想しよう。夕日でなくとも「赤い太陽」は我々の通念と言ってよい。しかし中国人は、太陽の常態色を“白”とみるのである。実際、昼の太陽は輝いて白いし、日本においても、夕日ですら白く輝いていることが多い。だから作者が、

夕日の赤色や赤く染まった夕方の景色を言いたいのなら、“白日”とは言わずに、何か他の表現をとったであろう。語彙レベルに限って言えば、用例数は少ないとはいえ、“紅日、紅輪、赤日”などの語彙が唐詩に用いられているからである。この他にもこの詩は、夕日に赤く染まった美しい景色を描写した詩とするには、色彩感覚に欠けている。この一句は、夕日の景色を詠ったものではないとみて、差し支えはないであろう。“白日”の述語に、沈んで見えなくなってしまった意味を表す動詞“尽”を用いていることも、その裏付けとしてよい。

では“白”は、輝いているさまを表しているのであろうか。清水氏によれば、早い時期では、楚辞に輝きを表す用法として用いられている例もあるが、逆に「あかるい」とか「かがやく」という感じを持たない例も、同じ楚辞に見えるそうである。唐詩においても、輝かない太陽を“白日”と表現した例はある。

高適『別董大』

千里黄雲白日曛　千里の黄雲、白日曛し

従って“白日”は、必ずしも輝いていなくてもよいのである。

筆者はかつて北京にいた頃、ある冬の日、中天にぼっかりと浮かんでいる白い太陽を目にしたことがある。空は霞んでいたのが眩しくなく、肉眼ではっきりと見詰めることができた。鶴鵲樓のあった永濟県は、山西省の西南部に位置し、気候風土は北方性で、埃っぽい。永濟県よりかなり東北寄りになるが、筆者はかつて同じ山西省の昔陽県に行った時、北京以上の埃っぽさに驚いたことがある。冬ともなれば、空がどんよりと曇っていることも多かろう。とすれば、筆者が北京で見たような、輝きを失った白い太陽である可能性は十分ある。この高適の詩も、二句目の“北風吹雁雪粉粉”から、季節は冬であることが解る。それに土色に濁った“黄河”と対になっている“白日”は、にぶい光を放っているか、輝きを失っていて

こそ相応しい。高適の詩においても、輝かない“白日”は、黄昏時のどんよりとした雲を表す“黄雲⁴⁾”と同じ平面に並べられている。濁った黄色と対になっている、にぶい白の例をあと二つ挙げておこう。

劉長卿『從軍』四

黄沙一万里　　黄沙，一万里
白首無人憐　　白首，人の憐れむなし

王昌齡『塞下曲』其二

黄塵足今古　　黄塵，今古に足りて
白骨乱蓬蒿　　白骨，蓬蒿に乱る

また次の詩にみる“白日”は、輝いているか否かなど、問題ではない。いずれも夕日で、日の沈んだ後が背景となっており、悲しみや憂いの心情を詠ったものである。

高適『宋中』其四

梁宛白日暮　　梁宛白日暮れ
梁山秋草時　　梁山秋草の時
君王不可見　　君王見るべからず
修竹令人悲　　修竹人をして悲します
九月桑葉尽　　九月の桑葉は尽き
寒風鳴樹枝　　寒風は樹枝を鳴らす

呂温『鞏路感懷』

馬嘶白日暮　　馬嘶いて白日暮れ
劍鳴秋氣来　　劍鳴って秋氣来たる
我心渺無際　　我が心は渺として際り無く
河上空徘徊　　河上を空しく徘徊す

中国語の造語法よりすれば、この“白”にはあまり意味がない。しかし太陽が“白”である限り、“白”が文法的に“虚化”することはないであろうし、“白”は“日”を分類・限定をしたり、強調をする成分ではないが、“日”の性質・属性を表しているから、清水氏の言う通り、「光明の太陽」という意識は、その奥の方で働き得るし、枕ことばのように意味のないことばでも、使われているだけある陰影を伴うことはあり得よう。太陽が輝いていないと言っても、それは雲か霞か埃に遮られているからであって、太陽自体が輝いているのは、厳然とした事実である。天子は如何に徳が衰えたと言っても、天子であることに変わりはない。だからこの詩においても、太陽は霧か埃に遮られて輝いていない方が、唐室内の状況を反映比喻するにはより適切であるが、輝いているとしたところで、詩の解釈上、根本的な支障をきたすような大きな矛盾は起きないであろう。それに“依山尽”とあるところからすれば、この一句は、太陽が沈む前の景色よりも、むしろ沈んだ後の情景、もしくは太陽が山に隠れたこと自体に意味の重点を置いていると思われるからである。次の一句“黄河入海流”との関連で見ると、一層その感が強くなるであろう。

六. 検証 2 —— “黄河入海流”

次に“海”についてみることにしよう。

中国は、ヨーロッパの古代文明が地中海を中心として栄えた、海洋性文明であるのとは対照的に、大陸内陸性の文明である。それは歴代王朝の都の位置を見れば一目瞭然である。従って古代においては、地理的に見て、文化の中心地から一番離れた所にある海は、文化の低い絶縁の地、未開の地を指し、“晦”に通じ、暗いイメージと結びついていた⁵⁾。それは唐詩にも用いられている“窮海”という語があることから了解できよう。この“窮海”は、海の遙かかなたという意味ではなくて、陸の尽きる果てにある海という意味である。中国の海は、黄海と言われる如く、川の水同様

に土色に濁っている。青く澄んだ美しい色をしている海ではない。不毛の地である砂漠に関する語に、“瀚海”（大砂漠）や“海風”（砂漠から吹いてくる風）のように“海”を付けるのも、形状の類似性だけでなく、この色に起因している面もあると思われる⁶⁾。このようなイメージを持つ“海”は、唐詩においても、果たして薄暗さや夜を背景とした文脈に用いられることが珍しくない。

岑参『送張子尉南海』

海暗三山雨 海は暗し三山の雨
花明五嶺春 花は明かなり五嶺の春

張若虚『春江花月夜』

春江潮水連海平 春江の潮水，海に連りて平かなり
海上明月共潮生 海上の明月，潮と共に生ず
.....
斜月沈沈蔵海霧 斜月は沈沈として海霧に蔵る

太陽や月は東から昇る。中国は地理的に見て、海は東にある。だから太陽や月が海から昇るといふ言い方は、唐詩でよく見かける。

張祜『題松汀駅』

海明先見日 海は明けて先ず日を見
江白廻聞風 江は白くして廻かに風を聞く

王湾『次北固山下』

海日生残夜 海日，残夜に生じ
江春入旧年 江春，旧年に入る

張九齡『望月懷遠』

海上生明月 海上に明月生じ
天涯共此時 天涯，此の時を共にす

五言絶句『登鶴鵲楼』について

しかし、いくら海が東の方角にあるからといって、海を直接眼にしていない所であって、日や月が海から昇るとか、海上の月という言い方を、そんなに頻繁にするものだろうか。次の句など、作詩の地理的背景からして、海とはとれないだろう。

李白『自巴東舟行經瞿唐峽登巫山最高峰還題壁』

江行幾千里　江行，幾千里
海月十五圓　海月，十五にして圓かなり
始經瞿唐峽　始めて瞿唐峽を経て
遂歩巫山巔　遂に巫山の巔を歩む

李白『蛾眉山月歌送蜀僧晏入中京』

月出蛾眉照滄海　月，蛾眉に出でて滄海を照らす

夜と言っても、月夜には月が皓々と照っているだけの明るさがある。“海”はこのような薄明るさ、逆に言えば、薄暗さと関連するのではないか。とすれば、“滄海”は月夜に横たわる黒い大地ととれなくもない。“滄”は“滄溟”という語からしても、暗さや黒さと結び付くアオである。

次に黄昏時の例を見よう。

李白『古風』其十一

黄河走東溟　黄河東溟に走り
白日落西海　白日西海に落つ

これなど、“東溟”と対になっているから、“西海”は固有名詞ではあり得ないし、“海”は“溟”との関連からすれば、海（湖）でも砂漠でもないであろう。太陽が沈んだ後の薄暗くなりつつある大地とはとれないだろうか。

李白『上雲楽』

西海栽若木 西海に若木を栽え
東溟植扶桑 東溟に扶桑を植える

この例からすれば、「中国人は大地の四方に海があると意識していた」という説は当てはまらないし、

李白『日出行』

日出東方隅 日の東方の隅より出でること
似従地底来 地底より来るに似たり
歴天又入海 天を歴りてまた海に入る

などは、“地底”と併置されている。

それでは、明け方はどうであろうか。

李白『古風』其十八

鷄鳴海色動 鷄鳴いて海色動く

顔真卿『登平望橋下作』

際海蒹葭色 際海は蒹葭色にして
終朝鳧雁声 終朝、鳧雁の声のす

“海色”は、“鷄鳴”より、空が白みかけてから太陽の出る前までの明るさを言ったものであり、蒹や葭はアオイから、早朝そんなに明るくない時間帯であることが解る。

以上のような例からみれば、“海”は、太陽の直射によって照らされていない日没後や朝太陽の出る前、また月の出ている薄暗い空間もしくは大地の形容表現ととることも可能ではないだろうか。

“海”をこのように解釈すると、『登鶴鶴楼』における上述の二つの問題

点——対句表現と連動文の解釈が、ともに解決される。つまり、“白日依山尽”も“黄河入海流”も、作者が現時点で直接目にしている光景であり、対句表現として釣り合いがとれること。黄河が薄暗い空間に注ぎ込んで流れ続ける情景を表現したものであること。この二点である。特に后者は、先行き不安な唐王室を暗示しているとすれば、正に“入海流”というこの連動文の語順でなくてはならないのである。

この“海”を薄暗い空間であると解釈できる連動文の例をもう一つ挙げておこう。場所も鸛鵲楼から望むことのできる、ほぼ同じ一帯で、黄河が南下して華山にぶつかり、東に方向を変える所である。

許渾『秋日赴闕題潼關驛楼』

紅葉晚蕭蕭	紅葉晚に蕭蕭
長亭酒一瓢	長亭酒一瓢
残雪帰太華	残雪太華に帰り
疏雨過中条	疏雨中条を過ぐ
樹色隨関廻	樹色関に随って廻かに
河声入海遙	河声海に入って遙かなり
帝郷明日到	帝郷明日到らんとして
猶自夢漁樵	猶自ら漁樵を夢む

一句から五句までは、作者の視界に入っている情景である。六句“河声入海遙”は、五句との対句であるので、“樹色隨関廻”と同等の視界や距離でなければならない。そしてこの詩も夕暮れ時であることに注意すべきである。ここは黄河の川幅が再び狭くなって流れも急になり、それが華山にぶつかって東流する所で、西から流れ込む渭水との合流点でもあって川音も大きい。その水音が暗がりにも吸い込まれていくさまを形容したのがこの連動文となったのである。「黄河の水声はとおく海に向かう」とか、「黄河の流れのひびきはるか東海に入るまでに伝わってゆく」という解釈に

は、やはり無理があろう。眼前に広がる情景を描写した一句から五句までの流れからすれば、浮いた感じを拭いさることはできない。“海”を日が落ちた後の薄暗い空間ととれば、この一句は、眼に見える具体的な光景として、他の詩句と同じように、眼前に生き生きと浮かんでくるのである。

川の流れについては、孔子の感慨以来、人生や移りゆく時の流れに対する慨嘆を詠じること、唐詩においても同様であるが、唐詩ではそれに加えて、かつて栄華を誇っていた王朝や天子を追憶し、時代の変貌を感慨する詩も珍しくない。今は初唐四傑の一人、盧照隣の一首を挙げるに留めておこう。盧照隣は、中風のために半身不随となって官を辞したと言われているが、自殺の直前に作られた『釈疾文三歌』は、太宗の貞観の治を念頭においているのであろうか、

東郊絶此麒麟筆　東郊に此の麒麟の筆を絶ち
西山秘此鳳凰柯　西山に此の鳳凰の柯を秘す

と、聖人（名君）の出でざるを嘆き、

歳去憂来兮東流水　歳去り憂い来る東流の水
地久天长兮人共死　地久しく天長く人は共に死す

と、時の王に受け入れられず、汨羅に身を投じた愛国詩人屈原の騷体を用いている。また、

夷為柏兮秋有実　夷は柏となりて秋に実有り
叔為柳兮春雨飛　叔は柳となりて春に雨のごとく飛ぶ

とあるところからすると、当の王朝に仕えるのを恥と考えていたのかも知れない。そして、この詩を作るに当って、すでに死を決意していたのであ

ろうか、最後の一句は屈原の最後を念頭において、

倏爾而笑 倏爾として笑い
汎滄浪兮不帰 滄浪に汎んで帰らず

と結び、自らも潁水に身を投じたのである。則天皇帝即位後5年経った689年のことであった。時代背景の違い、作者の性格の違いなどがあろう、鶴鵲樓の詩には、これほどの激しさはない。悲憤の声も聞えなければ、涙も流れていない。しかし寒さが厳しくなってきた中国北方初冬の、しかもすでに太陽が没してしまった後の、薄暗い空間を背景に、眼前に横たわる黒くなりつつある山々と、そこに向かって流れる黄河の光景を思い浮かべると、詩人の瞳の奥に、人知れず憂いの心情が宿っているのを感じとることは、果たして不可能だろうか⁷⁾。この点に関しては、次の一句“千里目”の用法との関連で見れば、一層明白になるのである。

七. 検証3——“欲窮千里目”

千里の目をキワメル表現は、『楚辞・招魂』に始まる。

目極千里兮傷春心 目は千里を極めて、春心を傷ましむ

以来“千里目”や“目極”また“極目”は、悲しみや憂いの心情の表現となった。物思いに耽っている時、何かを思いつめている時に遠くを眺めるのと同じである。決して雄大な景色を眺めたり、千里の眺望を賞でるのを目的とした表現なのではない。“目”は視覚としてとらえることのできる具体的なモノを対象としてはいないし⁸⁾、“目極”は、視界に入る一番遠い極点を指しているからである。そして唐詩では、時間的にみて夕暮れ時のものが多い。

岑参『山房春事』

梁園日暮乱飛鴉 梁園日暮乱飛の鴉
極目蕭条三両家 極目蕭条たり三両家

李白『登新平楼』

天長落日遠 天長くして落日遠し
水浄寒波流 水浄くして寒波流る
…………… ……………
蒼蒼幾万里 蒼蒼たる幾万里
目極令人愁 目極すれば人をして愁えしむ

魏徵『述懐』

古木鳴寒鳥 古木寒鳥鳴き
空山啼夜猿 空山夜猿啼く
既傷千里目 既に千里の目を傷ましめ
還驚九逝魂 還た九逝の魂を驚かす

“寒鳥”とあるから季節は冬であり，“夜猿”から夜であることが解る。そしてこれは、作者魏徵が唐朝創建のために、筆を投げて高祖の軍に従軍した当時の志を述べた詩である。

荆叔『題慈恩塔』

漢国山河在 漢国山河在り
秦陵草木深 秦陵草木深し
暮雲千里色 暮雲千里の色
無処不傷心 処として心を傷ましめざるは無し

これはすでに滅んだ王朝に対する感慨を述べた詩である。

それでは、このように確かな典拠を持つ一句“欲窮千里目”は、何故“極”を用いずに“窮”に改めたのだろうか。それには二つの理由が考えられる。

1. “窮”は“極”の意味であり、平仄の関係で“窮”とした。つまり『登鶴鵲樓』の詩は仄起式であるので、三句目第二字は平声字でなくてはならない。それで仄声字の“極”を避けて平声字“窮”を用いた。
2. “極”には、単に視界の届く一番遠い所という意味があるのみで、何かを明らかにする意味がないので“窮”とした。

もし理由が前者であるとする、今筆者の試みている仮説は、その分成立の根拠が弱くなる。後者の理由がなくなるからである。この点に関しては、次のように答えるしかない。

平仄の法と言っても、絶対的なものではなく、効果を上げるためには、ちょうど和歌の字余りがそうであるように、規則（形式）を破ることも珍しくない。それに楚辞は、唐詩において広く典拠として用いられている由緒ある古典である。だから作者が単に千里の眺望を眺めるだけを表現したくて、かつ“窮”が“極”と同じような意味であるとした場合、平仄の法に合わせて“窮”とするのを是とするか、典拠に合わせて“極”とするのを由とするか、その効果面における優劣判断を下すだけの鑑賞能力や学問的知識は、残念ながら筆者にはない。しかし「1」の理由で“窮”を用いたとすると、前半の二句を受けて憂いを表したこの句と、これに続く結句の“更上一層樓”とはどう結び付くのであろうか。遠くを眺めながら物思いに耽っている時に、その場を移動することは、普通あり得ないからである。とすれば、やはり「2」の理由を無視することができなくなってくるであろう。ここで確認のために、少し“窮”の例を見ておくことにしよう。

李白『登梅岡望金陵贈族姪高座寺僧中孚』

我来属天清　　我来りて天清に属し
登覧窮楚越　　登覧し、楚越を窮む

楚越の国を自分の目でしっかりと見定める意味である。

李白『尋高鳳石門山中元丹丘』

未窮三四山 未だ三四の山を窮めずして
已歴千万転 已に千万の転を歴ぐる

自分の足で歩きつくす意味である。

李白『入彭蠡經松門觀石鏡緬懷謝康樂題詩書遊覽之志』

余方窺石鏡 余方に石鏡を窺えば
兼得窮江源 兼ねて江源を窮むるを得たり

江源まで足を運び、その場所まで辿り着いて確認する意味である。

このように“窮”は、あるところかに何か（状態を含む）があることを想定し、そのモノ（状態）を自分で確認し、明らかにする意味である。

“目”は上述のように、具体的に視覚の対象があるのではない。上掲の岑参『山房春事』の詩句“極目蕭条三両家”は、目を凝らして“三両家”を見るのではなく、遠くを眺めた結果として“三両家”が目に入ったのである。

次に実際には眼にしていない光景を“目”している例を二首挙げよう。

劉長卿『罷撰官後將還旧居留辭李侍御』

蕭条遠回首 蕭条として遠く首を回せば
万里如在目 万里目に在るが如し

これは、今までに歩いてきた行程を、臉上に思い浮べているのである。

劉長卿『洛陽主簿叔知和駙承恩赴選伏辭一首』

長安想在目 長安想いて目に在り
前路遙髣髴 前路遙かにして髣髴たり

これは、これから行こうとしている長安を、脳裏に思い浮かべているのである。

このように見てくると、“欲窮千里目”は自ずと、視界の限りを尽くして遠くの景色を眺めるという意味ではなくなってこよう。“目”が“千里”や“極”と結び付いた時は、眼で見る対象は漠然としていて、むしろ悲しみや憂いの心情表現であると言える。この一句を唐室の将来に思いを馳せ、その行く末を案じて、この眼で見たいとする気持の表現ととることに問題はないと思うのであるが、如何であろうか。

八. “更上一層楼”の異説について

この一句については、仮説に述べた通りで、もはや改めて言及するまでもないと思われるが、平野彦次郎氏に特異な説⁹⁾があるので、念のために検討しておくことにしよう。

氏は“更”の「特に」という用例、および“一”の添え字用法を提示した上で、前半二句の大観は、すでに千里の目を窮めるもので、大景を叙する以上は、それが楼上の最高のところより眺めたものであることは当然であり、「一階上に上がる」の説には同意し難い。後半の二句は、楼に上がる意図である。つまりこの景を見るために、このように登った、とする。

この解釈に従えば、作者は鶴鵲楼からの景観を予め知っていて、その景色を見るためにこの楼にやって来たことが前提となっている。そのような場合“楼”は特定表現としなければならず、“一層楼”のような不定表現は、氏の解釈とは合わない。氏自身“一層楼”を「一の層楼（一の重なった楼）」と見るべきであると、不定表現であることを認める一方、これを特定化して鶴鵲楼であるとするのは、甚だしい矛盾と言わねばならない。因に氏の提示された三つの用例“高陽一酒徒”、“天地一沙鷗”、“江湖滿地一漁翁”はいずれも不定表現である。もちろん“一酒徒”は作者の高適であり、“一漁翁”も作者の杜甫であることは明白である。しかしこれらの

詩は、自らをあえて「一人の酒徒」,「一人の漁翁」になぞらえているのであって、内容的に人物や事物を特定化できることと、言語表現として特定表現であることとは、別次元の問題である。氏の解釈は、この両者を混同したところに問題がある。“一”はそれ自体には特定用法はなく、指示詞と併用されて初めて特定のものを指すことができる。だから氏の説が成立するためには、“千里目”もしくは“一層楼”が特定表現になっていなければ、前半二句との繋りが出てこないのである。増子と男氏がこの説を取り挙げて、漢語の語法として自然なものとは言い難い¹⁰⁾とするのは、この辺の事情を指してのことであろう。

言うまでもなくこの一句は「もう一階上に上がる」とするのが正しい。ただ何故上がるのかという作者の意図するところが、従来の説とは違うだけである。

九. 作詩背景比定の試み

それでは、この詩を作る背景となった、特定の時期や出来事は、具体的に比定できるであろうか。

まず、天子の威光が衰えたことにより、考えられるのは、安史の乱である。安史の乱は、名君の誉れ高い玄宗皇帝の出現により、開元の治を実現し、上昇気流にあった唐王朝に大きな打撃を与え、衰運へと向わせる歴史的な大事件であった。この事件は文学史上にも翳を落とし、唐詩においても、盛唐から中唐へと詩風の転換をもたらした。しかし、これは次の理由によって支持することはできない。

1. 安史の乱後の詩は、例えば杜甫の『春望』“国破山河在，城春草木深”や李白の『経乱離後天思流夜郎憶旧遊懷贈江夏韋太守良宰』“白骨成丘山，蒼生竟何罪”のように、もう少し直接的な表現をとっている。
2. 乱後も玄宗皇帝は健在である。

3. 安史の乱は755年で、この詩が収録されている『国秀集』に採録されている詩は、開元（713）から天宝三年（744）までの作であるから年代が合わない。

次に、玄宗皇帝が楊貴妃を寵愛し始め、政務を怠るようになって、宦官が実権を握るようになった時代である。中国史上宦官が最も跋扈した時期でもあり、詩の表現からすれば、正に唐王朝の将来を憂うべき状況が出現したのである。“黄河入海流”は安史の乱を予言したとも言えるし、そのような状況からすれば、この説の可能性は極めて高い。しかし玄宗皇帝が政務を執らなくなったとはいえ、これは政治に飽いてきた玄宗自らの意思であって、周囲の圧力によるのではない。“尽”という表現から、今一つの躊躇を覚えるのである。

ところで、先に『国秀集』に採録されている詩は、開元以来天宝三年までであると述べた。しかし中澤希男氏の指摘¹¹⁾によれば、実際は開元の初めに没している詩人も数人含まれているということであるから、開元以前の可能性も十分考えられる。とすれば、専横を欲しいままにし、中宗を毒殺した韋后も考えられるのであるが、韋后は武後の二番煎じであり、かつ時代的に武後の直後であってみれば、“黄河入海流”という表現からして、少々時期遅れの気がしないでもない。それにこれは、筆者自身少々細か過ぎることは承知の上であるが、毒殺による中宗の死は、“依山尽”という表現とは、些かそぐわないと思うのである。

残る可能性は、則天武後の時代であろう。先ず考えられるのは、武后が帝位に就き、国号を周と改めた690年である。中国史上最初の女帝の誕生である。武則天は、女帝であること、家系が卑しいこと、残虐無比であること等々、当時さまざまな悪評、非難があった。作者が武后を皇帝として認めることに心中承服さず、唐室には帝位が空位になった、あるいは唐室そのものがなくなったと嘆き“白日依山尽”と表現したことは十分考えられる。しかし『呉郡志』によれば、天后がこの詩を吟じ、その作者が誰であるかを尋ねた¹²⁾という。それが事実とすれば、この五言絶句は、武后

が天后と称されていた時代には、すでに作られていたことになる。とすれば、作詩年代は天后以前をも含めて検討しなければならないから、可能性としては次の三つが考えられる。

1. 武后が王皇后を追いつれし、自ら皇后の位に就いて、権力をほしいままに振舞うようになった頃。
2. 武后が天后と称し、実権を全て高宗から自分の手に移し、実質的に皇帝と変わらぬ地位を築いて、世に「二聖」と並び称されるようになった頃。
3. 高宗の死。高宗は武后が天后と称されている時に逝去した。その後中宗、睿宗と続くが、皇帝の権力は天后の思いのままであった。

この三説を比較すれば、後の二説の方が有力であることは、誰の目から見ても明かであろう。“白日”は高宗もしくは、中宗、睿宗を指している。

第二説の場合、高宗は健在ではあるが、武後の勢力がいよいよ高宗を凌ぐようになって、実質的に皇帝としての存在意義はなくなり、武后がこれに代って全ての政務を取り仕切っている。この状況を“白日依山尽”と表現したのである。“依山”という表現からすれば、天子の死そのものより、山陰に隠れてその存在意義が無くなったと解する方が、適当かも知れない。「二聖」とは、皇帝高宗の名誉体面を損なわないための方便に過ぎない。そして無教養で横暴な武氏一族が台頭してくれば、高宗に忠ならんとする者は、誰しも唐室の将来に憂いを抱き、“黄河入海流”と表現することは、当然と言えよう。

第三説は、言うまでもなからう。高宗に続く中宗、睿宗は武後の全くの傀儡であった。とは言え、武後の専横に不満を抱く人も多く、唐室に忠ならんとする臣下は、李敬業の謀反が示すように、潜伏している者も少なくなかったのである。

この第二説と第三説の比較は、新しい資料でも発見されない限り、その優劣判断は不可能である。しかしいづれにしろ、勢いの赴くところ、武后に対しての正面きっての反抗は不可能で、息を潜めていなければならない

情況からは、悲憤慷慨の口調ではなく、作者の性格も手伝って、このように憂いを秘めたおとなしい表現となったのであろう。

それでは天后は、この詩を目にした時、自分への批判であることを察知したのだろうか。この点に関しては全く不明である。『呉郡志』に“吟”とあるところからすれば、気がつかなかったともとれよう。しかし、武后は文芸を好み、文人を愛した。この方面では、歴代皇帝の中でも数少ない一級人物である。時代はやや下るが、自分への謀反が企まれた時、その檄文が余りに優れているために、その作者の才能に感嘆し、怒ることさえしなかったほどの天后にしてみれば、それを察知したところで、影響力のない人物の詠んだ詩片など歯牙に掛ける筈もない。今や天后として、皇帝はあって無きが如く、全権力を掌中に収めているのである。内心ニヤッとすることさえなく、涼しい顔で当の詩を吟じて、秀作として誉め、逆に恩を売るために褒美を与えることくらい朝飯前であったろう。

十. 残された問題

さて、今まで不問に付していたのであるが、それではこの詩の重要語の一つである“白日”が、天子の象徴であるという解釈は、果して可能だろうか。一番確実なのは、ある程度公式化された、そのような用例の存在であろうが、この点に関しては、残念ながら、管見の及ぶところ否と答えるしかない。ただ一つ、李白に次の一句が見えるのみである。

李白『万憤詞投魏郎中』

何六竜之浩蕩　何ぞ六竜の浩蕩かなる
遷白日于秦西　秦西に白日を遷す

これは安祿山の乱により、玄宗皇帝が蜀へ遷ったことを述べた句であり、“白日”は玄宗皇帝または唐室を指している。次の例。

李白『古風』其三十四

白日耀紫微　　白日，紫微に耀き
三公運權衡　　三公，權衡を運らす

これを対句ととれば，“白日”は“三公”との関連で、天子ととらざるを得ないであろう。しかし必ずしも対句とする必要もなければ、文字通り太陽である¹³⁾。いずれとも断定はし難い。また“白日”ではないが、晩唐の詩で、一部の専門家からは、唐朝の滅亡を予期したと目されている許渾の詩『咸陽城東樓』に、“日沈閣（太陽が樓閣の陰に沈む）”という、不確かな言い方がある。このような例からすれば、“白日”を天子とする確実な用例は皆無に等しいが、少なくとも当時の中国人に、“白日”を天子と結び付ける発想があったことは間違いないであろう。そこで思うに、当時「白日=天子」という図式が確立していたならば、“白日依山尽”は、表現が些か露骨に過ぎ、むしろこのような表現は避けるのが普通であって、山陰に隠れゆく太陽を見ながら、作者がフト唐室の現状にそれを重ね合せて、存在意義のなくなった天子を、臨時に白日になぞらえてこの詩を作った、とするのが穏当なところかも知れない。言論の自由のない時代にあっては、当代批判は慎重を期さねばならず、唐王朝を漢王朝になぞらえるのも一例であるが、こと天子に直接結び付く表現語句ともなれば、第三者がすぐにピンとくるような“指桑罵槐”式や双関語以上に不鮮明でなければならぬだろう。だから詩人の採る方法としては、パターン化された詩句を選ぶよりも、臨時に関連性の出てくる語句を用いるのが無難でもあり、表現上の効果も出てこよう。

時代は、文才にも優れていた名君太宗の御代が、単なる記憶としてではなく、まだ人々の身体や脳裏に直接体験として、その実感が鮮明に残っている唐王朝初期の頃である。作者の描いていた聖朝とは凡そかけ離れた方向へと、自分をも巻き込みながら、日増しに理想から逸脱しつつある唐室の現状を、内部にあって日々目撃し、体験し、日毎にその憂いを深めつつあった作者にしてみれば、隠れゆく太陽と、暗くなりつつある大地に吸い

込まれていく黄河の流れを眺めながら、その作者の眼前で展開している自然現象と、自身の身边で引き起こっている、権力欲が醸し出す現状とを重ね合わせて、悲嘆にくれた感慨を抱くのは極めて自然であり、このような表現を採ることは十分考えられよう。そして、ひとたびその表現の裏が判明したならば、一字一句の意味用法は、細かいところまで、極めて自然に理解でき、作者の真意が生き生きと我々の眼前に浮かび上がって、脳裏に鮮明に焼きつくことは、あたかも隠し絵を発見した如くである。そして『呉郡志』に見える作者朱佐日が『国秀集』にいう処士の朱斌であるとするなら、やがて作者はそのような唐室の将来に見切りをつけて、朝廷を辞して、隠遁の生活へと入っていったのである。いや、ひょっとしたら、すでに官職を辞した後には鶴鵲楼にやって来て、この一首をものにしたのかも知れない。とすると、唐室にはまだ一縷の望みを託していたのだろうか

欲窮千里目

更上一層楼………

しかし現実には、作者の僅かばかりの望みをも断つが如く、やがて武后は、中国史上最初の女帝として帝位に就くことになる。以来在位15年、天后時代を含めれば45年、万民の上に君臨したのである。その身にはさまざまな評価を浴びながら

白日依山尽

黄河入海流………

[補記] 1. 小論で提示した仮説に従えば、作者が登った楼は、必ずしも鶴鵲楼である必要はない。事実この詩を最初に収録した同時代編纂の『国秀集』には、朱斌作として単に『登楼』とあるだけである。とすれば、この詩における“千里目”は、いよいよ以って他の唐詩と同様、

実際の景色を眺めるのではなく、憂いの心情を表現した句であると言えよう。

2. 筆者は通説に疑問を抱いた当初、“白日”は作者、黄河の流れは作者の人生であると思った。つまり、前途有望な作者が何者かの讒言に遭って罪を得、左遷されるか官職を辞して、先行き不安な自分の将来を憂えた詩であると解釈した。そのような状況を考えれば、季節的には初冬が最も相応しいと思ったのである。しかし当時において、“白日”を一個人に譬えるのは不遜ではないかと思い直して、本稿のような仮説を立ててみたのであるが、その後“白日”をある個人に用いた例があることや、川の流れを個人の人生に譬えることはそんなに珍しいことではないので、今は当初の仮説も捨て切れないでいる。いずれにしる、『呉郡志』の記事が事実とすれば、天后時代に変わりはないし、初冬という季節は、どちらの説にも相応しい。ただ、作詩の背景は異なったものになる。

注

- (1) 『大清一統志』一百四十「蒲州府一」
鶴鵲樓（中略）旧志楼旧在郡城西南黄河中高阜处，時有鶴鵲棲其上遂名，後為河流衝没。
- (2) 吉川幸次郎「玉之渙」1987年『続人間詩話』所収
氏の説はかなり無理があるが、この説を踏襲発展させている人も少なくないので、関係部分を全文挙げておくことにする。
ところで「白日は山に依りて尽き」という白日は、まっしろにきらぎらとかがやく、まひるの太陽というのが、普通の語義である。注釈書のあるものが誤るように、落日の意味ではない。ではそれが「山に依りて尽き」とは、どういうことか。
ここの「白日」の二字は、太陽そのものよりも、きらぎらと光る太陽を中心として、その射出する光の矢に充満した天空をいうと思われる。それは大きく平野の上にかぶさり、たれさがり、地平と接するが、地平のふちどりとしてあるのは山なみである。その山なみにもたれかかるようにして、白日の支配する領域は、尽ききわまっているというのが、白

日依山尽という五字によって、詩人の意味せんとするものであったと、私は考える。

相当に苦しい解釈である。氏の強引とも思われる文面から察するに、氏自身矛盾を感じつつも、「白日は真昼のぎらぎらと輝く太陽である」という先入観から脱却できなかつたのではないかと思われる。

- (3) 清水茂「『白日』の解釈（积白日）」『吉川幸次郎博士退休記念論文集』1968年 所収
- (4) “黄雲”には、イ) 黄昏時の雲。ロ) 黄塵。の二通りの説があるが、これに続く二句目の“北風吹雁雪粉粉”との関連からすると、イ) の解釈が妥当であろう。また冒頭の“千里”は“十里”ともするが、この場合はロ) の解釈に繋るので“千里”とするのがよいと思われる。前半二句の解釈は、「黄昏時のどんよりした雲が一面空を覆い、太陽は霞んで淡い光を放っている。やがて北風が吹きはじめ、雁は北風に吹かれるように飛んで行き、雪が降りはじめてきた」とすべきであろう。ただ本論の主旨からすれば、イ) 説にしるロ) 説にしる、黄色が濁った色であることに変わりはないから、どちらにしても問題は生じない。
- (5) 中国古典に見る「海」についての論文には、次の三編がある。
吉川幸次郎「海と森」『吉川幸次郎全集』19 所収。初出は1947年。
前野直彬「海」『風月無尽』1972年 所収
植木久行「瀚海・海風考」『中国文学研究』八1982年 所収
- (6) 植木久行上掲論文
氏によれば、唐詩にもしばしば出てくる、“海”と関連のある“瀚海”という語は、もともと塞外の天山山脈から秦嶺山脈に至る広大な地域を指していたが、唐代になって大砂漠という一般名詞へと転じた。それは唐代における瀚海都護府の設置、瀚海軍の設置などの歴史的背景の外に、“海”という字の持つ意味の多様性に起因するという。
多様性とは、
1. 暗い（明るいに対する）
2. 文化水準の低さ
3. 広大さ、豊饒さ
等である。
- (7) 従来この詩に憂いを感じなかつたのは、次の理由によるものと思われる。
1. この詩には、唐詩に多用されている直接的に憂いを表す“愁、傷”や、憂いに結び付く“暮”などが用いられていない。“尽”は中性の語である。また季節を表す語が用いられていない。
2. 作者の念頭にあるのは、唐王朝の過去の栄華ではなく、現状から類推した将来の状況であったので、川の流れの描写が現在から未来への表現となった。そのために詠嘆表現と結び付けることなく、“海”を

文字通り「海」ととった。

3. 本来、何かに思いを馳せている場面に用いて、憂いなどを表す“千里目”が、願望を表す“欲窮”の目的語となったために、景色を眺める意味であると思いを違えをして、“千里目”を雄大な景観と解した。

4. 李翰「河中鸛鵲樓集序」（『文苑英華』卷七一〇）に

八月天高獲登茲樓，及復俯視瞬城，傍窺秦塞，紫氣度関而西入，
黄河触華而東匯。

とあるのにも影響を受けていよう。

(8) 前野直彬編『唐詩鑑賞辞典』昭和45年 p. 36

目は眼とちがって抽象的なはたらき、「まなざし」「視線」などの意味である。（西岡）

(9) 平野彦次郎『唐詩選研究』昭和49年 p. 181

(10) 松浦友久編『唐詩解釈辞典』1987年 p. 79

(11) 中澤希男「國秀集攷」『日本中國學會報』第三

開元以前に死亡した詩人として、『國秀集』には宋之問，杜審言，李嶠等の名前が見える。また沈佺期は開元初めに死亡している。

(12) 『吳郡志』卷二十二人物『欽定四庫全書』所収

朱佐日郡人兩登制科三為御史。（中略）天后嘗吟詩曰白日依山尽黄河入海流欲窮千里目更上一層樓問是誰作。李嶠對曰御史朱佐日詩也。賜綵百疋轉侍御史。

(13) 松浦友久『李白一詩と心象』1984年 p. 195には、「太陽のような聖明の天子が、紫微宮の玉座に耀いておられる」、田中克己『天遊の詩人 李白』1982年 p. 189には「白日が天子の紫微宮に輝き」とある。